キリストの福音誌（季刊）

エン・クリスト

*ΕΝ　ΧΡΙΣΤΩ*

主筆　小池辰雄

１９８９年１月　冬季号

──　第３７号　──

# 【目次】

◎独和対照

◎ 　 奥田昌道

◎ 奥田昌道

◎ 小池天光

◎「平安の所在」 小池天安

◎「どん底の愛」 小池天愛

◎「感話会より」 奥田昌道

◎「福音証言集」　［篠田英雄、今橋淳、今橋美穂子、今橋智子、小牧久時、弘野慶次郎、梅村康太郎、瀧澤保徳、澤田正信］（省略）

◎「編集だより」 小池辰雄（省略）

註：題名の後の「（著\*-\*\*\*）」という表示は、「小池辰雄著作集第\*巻の\*\*\*頁に転載済」であることを表わす。召団讃美歌の番号は、現在の「キリスト召団讃歌集」の新分類番号（A\*\*、B\*\*、C\*\*、D\*\*）を付し、本紙掲載時点の番号は［旧\*\*番］で表わす。

# DAS GRÖSSTE DRAMA IST DIE BIEBEL

──Sonett──

Frühmorgens 28. Nov. 1988 TATSUO KOIKE

Das größte Drama ist die Bibel,

Jetzo ist die Welt wieder wie der Turm zu Babel.

Aus der Bibel kommen geistige Kräfte des Herrn wirklich,

In Dem ich lebe, webe und bin täglich.

Wer weint, wer sehnt sich nach Gottes Reich,

Rufe nach dem Herrn, so kommt Er gleich.

Der heilige Geist hilft dir, dein Kreuz zu tragen,

Da Sein Kreuz gnädig dein alles hat getragen.

„Ein großes Drama ist die Bibel“ erscheint,

Der zehnte, der letzte Band meiner Werke :

Das ist mein alles, was gewidmet allen.

Tränen tropften herab, als es im Herzen gemeint.

Der Morgenstern scheint klar, als ich merke.

Mein Herr, Du siehst mich herzlichst vor Dich fallen !

# 聖書は最大のドラマである

──ソネット──

1988年 霜月28日払暁作　　　　　　　　　　　　　　 　　　　　　　天光

聖書は最大のドラマである、

今や世界は再たバベルの塔なるか。

聖書の中から主の御霊の力が本当に来る。

主さまの中に私は日々に生き、動き、在る。

　　涙をもち、神の国を慕う人は、

　　主に叫びかかれよ、主は直ちに来給う。

　　聖霊はが十字架を負う力となり給う。

　　主の十字架が恵み深く汝が一切を荷い給うた。

『聖書は大ドラマである』が出版された、

わが著作集の第十巻、最終巻が。

これは万人に捧げる我が一切である。

　　かく念じたら泪が滴った。

　　気がつくと、曙の明星が輝いていた。

　　主さま！　み前に胸底から平伏す私を！

〔註〕夢の中で独詩が湧いて来たのが午前三時。大方書き終えようとした頃、曙の明星が！　（黙22･16）主さま！み前に平伏す。

1989年1月冬季号〔エン・クリスト37号〕

# １９８８年秋期講演会・特別集会報告

京都召団　奥田昌道

今年の秋期講演会（京都）は、京大エマオ会および京都キリスト召団の共催により、１１月５日（土）午後２時から京大会館にて開催された。今回はとくに、小池先生の著作集全十巻の完結を記念し、そのことを主様に感謝しての講演会であった。第十巻『聖書は大ドラマである』を当日会場にて手にしていただくことはできなかったけれども、京大会館一階の講演室を埋めつくされた来会者の方々は、小池先生の御講演を通して第十巻の前味を十分に味わって下さったことと確信している。講演会は錦織成史兄の司会によりほぼ定刻に始められ、奥田が「光のある間に」（別稿参照）、次いで小憩ののち小池先生の「聖書は大ドラマである」（別稿参照）の迫力溢れるすばらしい御講演が１時間４０分ほどにわたって展開された。冒頭に先生は

「秋の集会（講演会）は今回限りです」

と宣言されたのには驚いた。それだけに、この最後の御講演は先生の全身をぶちまけての熱演であった。

「この無限無量なる福音を日本に！　わが同胞よ、まことの神に、キリストに回帰せよ、キリストに生きよ！」

との烈々たる祈りが聴く者の胸を打った。来会者は１７０名ほどであった。

午後の講演会を終えて、われわれは会場を鴨川畔の御車会館に移し、特別集会に臨んだ。５日（土）夜から６日（日）夕方までの一泊二日の集会である。参加者は地元の京都・大阪・奈良はじめ、東京、裾野、岡山、四国の各召団の兄弟姉妹らのほか、われわれと親しい信友の方々、さらには、講演会で共感されそのまま飛び入りで特別集会に参加された方など６０名余り（幼児は別）であった。以下に集会の概要だけをしるす。

〔第１回集会〕５日（土）夜７時～９時。司会・梅村康太郎（大阪）。聖書朗読はヨハネ伝20章11～18、同24～29。小池先生の講筵は「平安の所在」。短冊形の垂紙の聖句は

「平安汝らに在れ。我汝らを世にわす」（ヨハネ伝20章）

〔第２回集会〕６日（日）朝９時半～12時。司会・森下一男（四国）。朗読はヨハネ伝21章1～7。同13～19。講筵は「どん底の愛」。聖句は

「汝我を愛するか。汝は我に従え！」（ヨハネ伝21章）

午後の感話会については別稿に譲る。

# 「光のある間に」

奥田昌道

本日は「小池辰雄著作集全十巻完結記念・聖書講演会」ということでありますが、このように多数の方々がこの講演会に来会されましたことを心から嬉しく思い感謝いたしております。

小池先生が著作集全十巻を通して告白されていること、それを要約するならば、それは、聖書の中に秘められた神のき──これは神さまの呻きであり、私達一人ひとりに対する深い愛の呻きでありますが──これを先生は自らの呻きとして告白しておられるのだということができます。先生は聖書を読むことを次のように言っておられます。聖書はヘブライ語（旧約）・ギリシャ語（新約）で書かれたものだが、ヘブライ語・ギリシャ語ができればそれで聖書がわかるというものではない。ヘブライ語・ギリシャ語の奥にある、神の根源語に聴き入ることだ、その響きを受けとることだ、と。詩篇の第19篇に、

「語らず言わず、その声きこえざるに、その響きは全地にあまねく、そのは地のにまで及ぶ」

とあります。先生は神の根源語の響きを聴いておられる、その響きの中に身を投じておられる。そのとき先生は、主の前に、十字架において既に自分が無罪・無私とされてあるという絶対恩寵の根源現実を全身で深く受けとっておられるのです。そして、そこに臨み来る聖霊が神の根源語の響きを受けとらせるのだ、と告白しておられます。聖書は神の霊によって書かれたものですから、読む側においても神の霊の導きを必要といたします。ヨハネの第一の手紙では、

「あなたがたのうちには、キリストからいただいた油〔＝聖霊〕がとどまっているので、だれにも教えてもらう必要はない。この油が、すべてのことをあなたがたに教える。」（ヨハネ一2･27）

と書いてあります。こういうわけで先生は、いよいよ深く聖霊にとらえられ導かれて、聖書の現実を体感し告白されるようになった、その結晶が著作集全十巻であるということができます。とりわけ私は今回の第十巻『聖書は大ドラマである』に大きな期待を寄せております。というのは、膨大な旧・新約聖書、ことに旧約聖書は我々日本人にとっては取っつきにくい書であります。それをわかり易く、そのエッセンスを示して下さり、よき道しるべを与えているのがこの第十巻であるからです。これを助けとし拠りどころとして私達は、旧約聖書の森の中へ楽しく分け入って行くことが出来るでありましょう。

旧約聖書は、歴史の部分（イスラエル民族の）や律法、預言書、詩篇（讃美と祈り）、さらには文学的作品（ヨブ記、伝道の書など）など様々の内容のものから成っていますが、その全体が、神からの人間に対する呼びかけ、語りかけの書であるということができます。キリストは、

「この書〔＝旧約〕は我につきてするものなり」（ヨハネ5･39）

と言われました。また、復活の主は、弟子たちに、

「モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた」（ルカ24･27）

とあります。新約聖書では、御子キリストは、ロゴス・キリスト（言霊なるキリスト）の受肉体──神からわされた生けるの──としてとらえられています（ヨハネ1･1～18参照）。

「このにがあった」

と。だからイエス・キリストの存在そのものが私達への語りかけであります。

「恵みとに満ちていた」

このイエスの存在が、即、言であり、語りかけであります。イエスの発せられた言葉やなさった行為は、その躍動体にほかなりません。

今、私の心からの願いは、聖書をわれわれの同胞が、日本民族が、ほんとうに「心の糧」として吸収してほしい、そのために真剣に聖書に取り組んでほしい、ということです。とかく聖書というと、あれはキリスト教徒の教典だ、クリスチャンだけの読むものだという先入観ないしは誤解があります。こういった先入観から解き放たれて虚心に聖書に読み入ってほしい。神は無色透明なるお方、愛そのものなるお方です。これを最を鮮かに的確に示してくださったのがキリストであります。新約聖書の中のキリストの言の中で最も感動的なものの一つは、あの「山上の垂訓」の一節、

「天の父は、その日をしき者の上にも善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせ給うなり……さらば汝らの天の父のきが如く、汝らも全かれ」（マタイ伝5･45～48）

であり、また、

「空の鳥を見よ、野の花を見よ、天の父は彼らを養ってあり給う。まして汝らをや。まず、神の国と神の義とを求めよ、さらば、すべて必要なるものは添えて与えられるべし」（マタイ伝6･25～34の要約）

とさとされた箇所であります。何たる深い神信頼か、無限無量の絶対愛か！　キリストは、人の善悪や民族の違いによって人を分け隔てなさらない。その点においても「旧約」の限界を完全に突き抜けておられます。

旧約聖書を読んで感心することは、イスラエル民族のあり方です。彼らにとっては、神さまと取っ組むことが民族の生きであった。民族としての最大の関心事は、「ヤーウェーの神」として自らを現わした神とイスラエルの民族とが常に正しい関係にあることであった。この神のを求め、これに従うことであった。という点であります。目に見えない神、言をもって語りかけ給う神、このような神と取っ組んで貫いてきたところに民族としての偉大さがあると思う。それに対して日本を思うとき、日本はいろんな面で優れた民であるが、残念なことにただ一つを欠く。それは聖書を受け入れようとしないことであります。日本は明治以降、西欧のすぐれたを受容しました。しかし、その源にある聖書は受け入れませんでした。

さて、今日の演題は「光のある間に」ですが、これはヨハネ伝第12章の次の箇所からとりました。

「イエスは言われた。『光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい』」（ヨハネ12･35～36）

この御言を通して申し上げたいことは、第一に、イエス・キリストという「光」が輝いている間にこの光を受けとってほしいということです。第二に、あなたの人生がなお「光」の中にある間に、すなわち「死」という暗闇がやってこない間にキリストなる光を受けとってほしいということです（伝道の書12･1～2参照）。第三に、これは個人的な願いかも知れませんが、小池先生が地上にいらっしゃる間に、先生を通してまことの光を受けとってほしいのです。その意味からも、皆様が御来会下さったことを心から感謝申し上げるものであります。

# 「聖書は大ドラマである」

小池天光

これは愚生の著作集第十巻の題名であり、東京、京都、姫路で講演をした主題であった。ここにはその骨子一端を書くことにする。

聖書はその内容に於て世界最大のドラマである。絶対次元の霊的人格神が隠れたる著者であり、劇的内容の主人公が旧約聖書では隠れたる主人公として、新約聖書ではわなる主人公としてのキリストであり、惨憺たる人間の歴史に絶対界から光を投じている多次元的なドラマである。神の聖願は聖名の故の人間救済にあるが、果たしてその終末は。れ祈るのみ。

聖書の内容の舞台は世界三大陸のに当たるパレスティナを中心とした近東、南欧、北アフリカであり、時は永遠を背景とした天地創造から歴史の終末にる大時限であり、霊的空間は諸々の天界、煉獄的相対界、地獄界（）であり、役者はイスラエル民族を主役とした諸民族の人物及び庶民であり、劇的内容そのものはイスラエル民族の興亡浮沈を契機とした世界救済の預言的史劇である。

聖書は断じて過去の書ではなく、永遠を背景とした現在性、現実性の強い書で、我々読者の現実に迫って火花を散らす。またこのようなわけだから第三者的立場で読める書ではない。汝と我の対決の場であり、我と汝の融合の場である。究極的には神、キリストヘの回帰、帰入、一如に化せられてゆく現実救済の書である。光を浴びせ、生命づけて前進せしめではやまぬ力の書であり、愛の生命を与え、救われた者を通して隣人を救わんとする書である。

人生そのものがドラマであるが、聖書は誰のドラマ的生涯をも、どん底から救いあげる力をもっている。同じ涙を涙し、同じきを歎き、深いなぐさめを与えてくれる。いかなるマイナスの事態にも、耐え且つ勝たしめたる慰めの主、助け主なる聖霊がり、内住して下さる。聖霊は一切をひきうけたキリストの十字架が体受されるところに来り給うキリストの霊である。旧約も新約もキリストを預言乃至証しているからキリストの光で読むとき、無量無限の内実にあずかる。

さて神の最初の創造が光であったということは、光が一切の原点であることをし給うたのである。漢字の「光」は太陽から七つの光線が出ている象徴的な字である。横線二本をとると火という漢字になる。太陽は燃ゆる火であり、七彩の虹を現ずる白光である。日本の国旗が太陽であるということは、創造の神意をわせる極めて宗教的なきをもったものである。民族神話においてもである。大宇宙の無数の恒星が多様の太陽ではないか。

創世記第１、第２章に人の創造が、創造の最終段階として語られている。

「神は人をおのがに（即して）創造した」（創1･27）

とある。神は無相の相であるから、その霊性、神格性を人間は本来いている。仏教で

「ことごとくあり」

というのと同類である。

創世記第２章の神話では、を素材としてを形成し、これに神の生命の意気を吹き入れて、生魂的存在とした、とある。即ちアダムは天地人というわけである。霊肉渾然たるのがアダムの本来の相であるという。動物的には雌雄ができていたが、には彼にう相手がいないので、神はアダムをして眠らせ、彼の心臓部の肉を裂き肋骨を一本採り出して女を作り、彼に彼女を見せた。するとアダムは喜びのあまり、

「これぞわが骨の骨、わが肉の肉」（創2･23）

と叫んだ。本来一者たるアダムが二者となったのだから、二にして一なる関係で、これが夫婦の一体関係を表わす素晴らしい神話である。しかも女性は神の最後の作品として正に美の傑作である。アダムのたる女性はエバ（原語は「ハッワー」生者、或は生命づける者）は即ち生命を生む母の意をもつ。

さて物語は省略するが、サタンの使者蛇がエバに

「善悪を知るののをべると神の如くなる」

といって誘惑した。エバは神からの禁断の樹の果を喰べてアダムに与えた。ここに神の言を破った罪が生じた。二人は楽園的自然霊然たる次元から、道徳的善悪意識の次元に落ちた。悪を知って神から身を木の下蔭に隠した。アダムは神様から

「はどこにいるか」

と問われた。神との関係が失われた者に対する神の審きとあわれみの声である。「楽園喪失」である。

現代の世界がこの楽園喪失の深刻な相の中にある。失明の大詩人ミルトンが不朽の名作『パラダイス・ロスト』を書いたである。その冒頭の句を掲げる。

「人ののよ、また禁断の樹のよ──その致命のゆえに死ともろもろのとは世に入りエデンは失せた、ひとりのいやまさる人われらをし、の座をすまで──」（藤井武訳）

楽園を失なったことは神との関係が本質的には切れたことである。善悪を知っても悪に勝ち切れないという原罪人となった。神中心から自己中心の人間となった。万人は我執にわれた罪びとである、という現実をこの神話はいみじくもしている。パウロのロマ書７章のなやみ、うめき、かなしみの現実である。東西古今のまことの宗教家の問題の焦点である。その罪業から脱する道は。キリストの福音との仏道の二大宗教が示している通りだ。

このアダムとエバとが相知って（ヘブライ語的表現）生まれたのがカインとアベルの兄弟。カインは畠野のを神に捧げた。アベルは牧場のを捧げた。その捧げた心と態度に於てカインは神意に添わなかったと見えて、アベルとその捧げものを神はした。これがカインのアベルに対する妬みとなって、カインはアベルを襲って殺害した。アダム・エバの神との関係が切れた結果としてカインとアベルの横の関係も殺人という罪によって切れた。殺人は何といってもけたちがいの罪である。しかも世界の歴史は、個人的、集団的、種族・民族的、国家的殺人（戦争）の非連続の連続ではないか。まことに惨憺たる人類である。ダンテが深刻なを書いたが、あれが現実なのである。

アベルの血は犠牲の血であった。これが神のたるキリストのの血の預言となった。アベルのあとで生まれたセツの、アダムから七代目にエノク（ヘノーク「従者」の意）という人物が現われた。６５歳でメトセラを生んだ。それから３００年間神に従い歩いた、その名の如く。３６５年の歳月を地上の生涯とした。すると彼は見えなくなった。

「居らずなりき」

とある。原語は「アイン」からくる「エーネンヌー」という語で、無、不在、無人、無一物等の意をもつ。彼の前後の人たちはみな「死んだ」とある中で、彼のみ「不在となった」とある。死を見ずして去った。神に信従して神と共に歩いたその実存の果であった。旧約でこのエノクとエリヤだけが地上からそういう去り方をした。

次に出てくるドラマは「ノアの大洪水」。ノアも

「義人でき者で、神とに歩いた」

ので、アララット山でを作ることを神様に命ぜられた。山間に舟とは何ごとかと人々は思った。人間界の神の審判たる大洪水からノアの家族と動物どもが一対ずつ方舟に入れられれる民と獣類となるという物語である。

次はイスラエル族長アブラハムのことであるが、彼は神様から、ウルを出で、ハランを去って、神ののまにまに旅をする。目ざす地はカナン族の地（パレスティナ）であった。

年老いて子供が出来ないアブラハムに神は

「天の星を見よ、汝の子孫はこれらの無数の星の如くなるぞ」

天下の諸族の祝福の源となるぞ、とのみ告げである。アブラハムは

「エホバを信じた。エホバはこれを彼の義とした」（創15･6）

とある。信じた、という語は

「アーメンとした」

という語で、神を信ずるとは、神の存在と言と行為、要するに全的に神を然り、真なりとすることで、自分の判断も経験も要するに自分そのものを神のみ前に投げ出して自己を否定してかかる態勢である。だから信仰は信行、信交である。全的内面的行為である。かかる全的な托信を神は義となし給う。

神はそのアブラハムに、与えられたイサクというをとしてささげよ、との前言の祝福と絶対矛盾の命令を発した。千人中、九九九名が「何故」と神に反問するだろう。アブラハムはし黙って従ってモリアの地に向かった。現地でと火が備えられたがかいないのをってイサクがねた。アブラハムはイサクを縛って薪の上に置き、あわやらんとした。、天使が現われてアブラハムに中止を命じた。神はアブラハムの信仰が正に信行であるを認め給うた。パウロが

「アブラハムは信仰によって義とされた」

といったのは前出の創世記15･6により、ヤコブが

「アブラハムは行によりて義とされた」

といったのはこの創世記22章の記事によるものだが、アブラハムの信仰は正に信・一如の信行なのである。このイサク献供もキリストの十字架への預言である。我々に於てはキリストの十字架の贖罪を全的に信受、体受することによってキリストの義が与えられる、その実体は聖霊である。

さてイサクの子ヤコブは、父に命ぜられて、お嫁さがしに、母リベカの兄ラバンの娘の中から妻をるべくハランへの旅に着いた。往路の石枕の夢のはなしはここに略す。帰路は、正妻ラケルとジルハ及びラケルの姉レアと侍女ビルハの４人の女性によって与えられた１１人の子らと畜群をれての群であったが。ヨルダンの支流のヤボクの渡しで、みんなを対岸に渡し、彼一人にとどまっていた。すると天使が現われて彼とをとった。ヤコブは横網的な体躯と見えて負けない。明方が近づいて来たので天使は霊力を以ってヤコブの腰骨をはずした。彼はになったが、天使にしがみついて、私を祝福しなければ離さないと叫ぶ。そこで天使はヤコブに汝の名を今から

「イスラエル」

と呼ぶことにする、と新しい名で祝福した。

「神と取っ組む者」

の意だ。神の天使に負けて天使の勝利をいただいた名である。それで「イスラエル」は

「神勝ち給う」

の意ももつ。我々は神、キリストに降参すると、神・キリストのみ力をる。これは大切な消息である。神・キリストに降参し、すまでは聖書の世界には入れないことを銘記せよ、である。

ヤコブ（イスラエル）とラケルの間にできた宝の子ヨセフの劇的な生涯は創世記37章から50章にって展開しているから、是非読んで下さい。生涯自身がやはりキリストの預言である。

次に現われた大人物はモーセであるが、彼がシナイ半島のホレブの山で出会った神との対話の記事は歴史的に重要なものである。はエジプトで苦しんでいるイスラエルの民を救いださんとモーセに自現し給うた。モーセの問に対して

「我は在りて在る者なり」

と応えたとある。しかし私はある夏の夕、太陽の光線が雲間から指しかかってくるのを見て、太陽が在るということが地球を在らしめていることに気がついた。地球は太陽に絶対依存である。太陽は地球を引き廻し、地球のあらゆるものを光熱で生かしめている。神は我々の信不信にらず我々を在らしめ給うている。これが絶対恩寵であり、絶対愛である。かくてエホバの言は

「我は在りて在らしむる者なり」

という奥のひびきを以て迫って来た。これが隠れた神意と見た。

全聖書の著しい箇所をこの調子で書いていたらこの小冊子に到底載せきれないので、拙著第十巻『聖書は大ドラマである』を是非とも読んで下さい。

モーセが神のみ力に導かれて果たした出エジプトは旧約聖書の極めて重大なる劇的な記事である。出エジプトの大奇蹟──奇蹟などという言は実は用いたくない。神の生けるみのによったまでのことである──のあとでモーセはシナイ山で「十言」を賜る。モーセの「十言」は実は隠れた福音であった。「十誠」ではなく、イスラエル民族及びその各人を信愛して語った断言命法である。

「汝殺すれ」

ではない、

「汝は殺人はしない」

私が汝の神であるから、そんなことはしないね、との信愛の言である。親子関係に信愛が失せたら親子関係は崩れる。だから私は隠れた福音だというのである。師弟関係も、労使関係も皆信愛の生命線が失せたら、どれも本ものでなくなる。そこには人格的な離反、裏切りが生ずる。キリストの十字架はローマ、ユダヤのさまざまな因子の裏切りを背負ったみ姿である。それをも

「ゆるしてやって下さい」

と彼は血を流しながら神に祈ったのである。

モーセは民の不信の罪をってピスガの山頂ではるか約束の地カナンを望み見ただけで贖罪的な死を死なねばならなかった。モーセにをされたヨシュアは彼の遺志を受けてヨルダンを渡り、カナンの地を勢力下に置いた。その後、士師時代（紀元前１２００年頃から１０２０年）が続いた。士師とは審判者のことで、相継ぐ審判者たちはエホバの霊が臨んで神に選ばれたカリスマ（霊賜）的指導者たちで、非成文律的な民事審判と、外敵に対する武力抗争もする智者であり勇者であった。その著しき二人はギデオンとサムソンである。

ギデオンはミデアン征服を命ぜられるに当たり、神の霊顕に接し、み力にかった。そこで彼は祭壇を築いて之を「ヤハウェー・シヤーローム」「平安の神」と名づけた（士師6･23～24）。「」というイスラエル人の挨拶の起源はこれである。「平安」は力を賜っている安らかさである。かくて、精鋭三百を以ってミデアンの大軍を大敗北せしめた有名な戦勝を得た。

次は怪力サムソンの物語りであるが、ペリシテの偶像神ダゴンの祭で、大を支えている大円柱を両手で突っ張って倒し、自らもその下で仆れつつ、三千余名のペリシテ人を墜落死させたサムソンの復讐は余りにも有名な劇的偉業であった。失明の大詩人ミルトンが『サムソン』という詩でこうっている。

「ては最善、たとい時に疑うとも、

至高の知慧の測り知れぬは

いやはてには常に最善なりき。

神は時にみ顔をかくし給う、

されど思いがけなくも帰りりて

忠信なる戦士に折りよくも

輝かしくをもたらし給う」（私訳）

ミルトン自身失明のさを味わったので、この詩の中に彼の痛ましき告白の詩句が処々に散在しているが、左の句はキリストに在っての勝利の告白である。

士師時代のあとで、サウル、ダビデ、ソロモンの単立王朝時代が来るが、特に王者らしき性格のダビデの生涯は波瀾万丈の劇的なもので、彼の情熱的人格そのものが極めて劇的なもので、功罪、の交錯する中でも、神に対してしている彼の魂のは美しい。詩篇の中にはダビデの原作が相当あると私は見ている。サウル王に妬まれて追跡されているダビデは、「敵は本能寺にあり」を露思わなかった忠誠の魂であった。

アブラハムは信仰の元祖として、ダビデはメシアの原型として、キリストの系譜の冒頭に置かれている。

ソロモンのあと、北王国イスラエル、南王国ユダに分かれるが、イスラエル王アハブ時代（紀元前８７１～８５２）に現われた預言者エリヤ、その衣鉢を継いだ預言者エリシヤは霊的二巨星であった。北王朝の末期に首都サマリヤに南王国からやって来て、神の義の烈しい預言をしたアモス。続いて北王国とその運命を共にする、愛の預言者ホセヤ。アッシリヤ王サルゴンがやがて北王国の首都サマリヤを陥落させた、時に紀前７２１年。

南王国ユダには、ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの四王時代に現われた大預言者イザヤ（イザヤ書1～39章）、彼は信仰の戦士、神を聖者として高唱した預言者であり、すばらしい天国的希望（イザヤ第11章）の啓示も受けた。南王国がバビロン王ネブカドネザルのため滅ぼされバビロニヤ捕囚時代（紀元前５８７～５３８）を迎えることになる。その滅亡のときに運命を共にした大預言者はエレミヤである。捕囚期に捕囚の人々の霊的指導をしていたのはエゼキエルである。

北王国はアッシリヤに、南王国はバビロニヤに滅されたが、これは預言者たちが

「神に帰れ！」

と叫ぶごとく神に立ち帰らなかった民族の罪を神が罰し給うたわけであった。国滅びて遺れる信仰の民あり、それを支える「律法・預言者・諸書」なる経典（旧約聖書）あり、神意を叫んでやまぬ預言者あり、というところに選民イスラエル民族の強さがある。

捕囚期が、新興国ペルシャのクロス王によって断たれ、捕囚民のエルサレム帰還がゆるされることになる。その頃現われた無名の大預言者が「第二イザヤ」と称われる人物で、イザヤ書40～55章がその預言内容である。その中に「エホバの僕」（エベド・ヤハウェー）という四つの詩があるが、その第四詩がイザヤ書53章で、その内容はキリストの預言そのものというべき驚くべき文字で、旧約の最深の文字である。贖罪主キリストさながらの文字である。キリストは正にこれを自分への預言と体受して十字架にかかり給うた。

これに対比する輝かしい文字がイザヤ書35章で、これは救済の新天地、正に楽園回復の文字である。

しかもキリスト・イエスは地上でその楽園を現じて歩いておられたのである。その記事が即ちマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書である。そして四福音書のフィナーレが、十字架であり復活である。（であるから「エン・クリスト」第36号に書いたように）35/53（53分の35）なのである。十字架（53）の土台に聖霊の力による福音的現実（35）が展開するのである。

ここには聖句を引用するスペースがないから是非ともイザヤ53章と35章をじっくりお読み下さい。その聖霊降臨がヨエル書に預言されている事態で、使徒行伝第２章にある如き不思議なことが起きた。キリスト教の歴史はここに始まる。ユダヤ教のパリサイの急先鋒サウロがダマスコ途上で復活のキリストに霊撃されて大回心、大回帰をしてキリストの僕となって大伝道をし、大文字を書いた。ペテロもがらり転心して聖霊の使徒となり、カトリックはペテロを元祖とする霊統をつくった。──現実には大へんずれはしたが。それだけ逆にベルナールやフランシスやザビエルの如き霊的人物が現われた。キリストの愛弟子ヨハネはパトモスにもって黙示録を書くべき使命を負わされた。

黙示録のことは「エン・クリスト」誌の第19、20、21号に於て（上）（中）（下）と三回にって書いてあるから読んでいただきたい。

の君、キリストが七つの封印の第五の封印を解き給うたとき、神のため、福音のため身を以って証しをなした者たちが、

「聖にして真なる主よ、までかないで、地に住む者に、我らの血の復讐をして下さらないのですか」（黙6･10）

と叫んだ。これに対して、まだ殉道の兄弟たちの数の満つるまで待っていなさい、との答えであった。やがて「の」のときが来る。そのとき天来の復讐がなされる。人間の歴史、人間の判断、評価、認識、審判等は、神の、キリストのそれとはちがったものが多い。

「神知り給う」

の詩篇139である。まことの善意、魂の砕け、義のため、愛のため、誤解され、迫害され、棄てられた者たちは安んじて主の復讐にまかせまつるがい。

の十字架の血の贖いに救われ、聖名のため大なる苦難、迫害をった人たちは、天界のキリストの幕屋に入れられて、の水の泉に導かれ、感謝、歓喜の涙を流すのである（黙7･14～17参照）。

第19章には

「神の僕らの血の復讐」

がなされたことがされてある（黙19･1～2）。キリストの十字架に救われ、おのが十字架を負った人々はなる哉！　そのためには聖霊の力ある愛が勝たしめ給うたのである。そういう人たちは

「羔の婚姻」

に招かれる最たる人々である（黙19･7～8参照）。

人類の歴史の終末はやがて来る。ヨハネが示された黙示（顕示）もであるが、その神の国の「新天新地」では神の幕屋が張られ、東西古今の、神と羔のみが招き入れ給うたあらゆる人種、国民、民族の神の民らしき人たち──それは人間の側のあらゆる差別を越えたもの──が神人融合の境地でくらすのである（黙21･1～4参照）。

「神の都にはの照らすを要せず、神の栄光これを照し、の君がそのである」

都の門は開けっぱなし、無門にひとし。生命の水の河が流れ、河の両岸には十二種の樹が花咲き実を結ぶ。不老の妙薬である（黙21･22～22･2参照）。ハレルヤ、主よ来たり給え！　「の」なる主よ！（黙22･16）。筆者現に曙の明星を仰ぎつつ、この筆をく！（１９８８年１１月２６日未明）